

栄西の仏教思想について

鷲 阪 宗 演

—

比叡山延暦寺は最澄によって開創され、円密禅戒の総合仏教として、日本文化史上に重要な役割を果たしてきた。鎌倉時代に活躍した多くの仏教者は、叡山の学場と深い関わりをもっている。たとえば、良忍をはじめとして、法然・栄西・親鸞・道元・日蓮は叡山で修学し、後にそれぞれ独自の仏教を構築した。わが国、平安の末葉には、貴族門閥の勢力が次第に武士に移行して、世の人々は保元・平治の乱の様相をして、末法到来の意識をもつようになった。こうした末法濁世の時代観は、かえって真摯に正法を求めて、実現しようとする新宗教運動を惹起することとなった。そこで、日本臨済宗の始祖といわれる栄西も叡山に学び、後には下山して入宋し、臨済宗の一派である黄龍派の禅を伝え、禅宗を布教するために東奔西走の活躍をした。しかし、栄西の思想・信仰は彼の著した多くの著作をみても分かるように複合的な性格をもったものであった。栄西の仏教は最澄仏教の再興を意図したものであって、単に禅宗の一派だけを弘通したものではなかった。

栄西の仏教思想は総合的であり複合的な性格を内包しているために、その思想の理解に苦慮するのはやむをえないことである。まず、彼の思想を考察する前に、生涯について述べる。

二

虎関師練の『元亨釈書』第二巻によつて、栄西の伝をみると、永治元年四月二十日、栄西（一一四一—一二一五）は、備中国吉備津神社の社家賀陽氏の子として生まれた¹。八歳で父について、俱舍頌を読み、十一歳のとき、回国安養寺の静心について、寺門流の天台教学を学んだ。十四歳のとき、比叡山戒壇院で受戒し、こののち静心の法兄千命から虚空藏求聞持法を授かり、しばしば靈感を見たという。この千命からは寺門流の台密の灌頂を受けている。比叡山の有弁について天台教学を学んでいる。

栄西は、さらに伯耆の大山の基好から密乗の蘊奥を学んでいる。今枝愛真氏は、基好について

この基好は、その房号からも推察されるように、天台教学の根本理念である円頓戒・止観業・遮那業・達磨禅の四種相承のうち、とくに禅の相承について一見識をもっており、したがって、山門の教学に対して批判的な立場をとっていた人ではなからうかと思われる。そこで、栄西はこの基好から台密の灌頂を受け、みずから葉上流という台密の一流を創始するとともに、禅についても大いに啓発され、日本天台の進むべき新しい方向を学びとつたにちがいない。

といわれている。この後、比叡山にもどつた栄西は、重ねて顕意から台密の灌頂をうけている。

栄西は、仁安三年（一一六八）四月、商船に乗つて入宋した。栄西の第一回入宋の動機について、『元亨釈書』は何も述べていないが、『本朝高僧伝』は「細² 関大蔵、掩³ 関八載、常聴⁴ 支那禅法之盛、寄⁵ 思南詢⁶」と述べて、宋朝禅に関心をもつて入宋したとしている。『興禅護国論』に取められている作者不詳の序によれば

二十七歳在⁷ 伯耆州大山⁸ 勤修一夏、偶然有⁹ 得¹⁰ 唐本法華經。則自以為、渡海之祥。遂告¹¹ 父母¹² 而赴¹³ 筑州。会遇¹⁴ 宋国通事李德昭者於博多津、聞¹⁵ 彼地禅宗之盛、発¹⁶ 希有思¹⁷。

と入宋の動機が述べられている。栄西の入宋の目的と考えられるものは、日本天台の発祥地である中国にわたり、宋朝仏教を見聞することにあつたのであろう。

栄西は、乾道四年五月、四明を出発して丹丘に赴いた。そこで、さきに入宋していた俊乗房重源と出逢い、一緒に天台山に登り、智者大師の塔を参拝し、五百羅漢に茶を供養して、明州にもどり、阿育王山の仏舍利塔を礼拝し、広慧禅寺の知客にあい、対話して啓発されるところがあつた。栄西と広慧禅寺の知客の問答について、『本朝高僧伝』に
 時年二十八、会遇「広慧寺知賓之僧」興_レ之相語。問曰、日本有_レ禅寺乎。西曰、我邦台宗始祖伝教大師、延暦末年入唐、伝_レ台密禅三宗。今台密盛禅滅久矣。故航_レ海来、不_レ知得否。知賓曰、子欲_レ究_レ祖师禅。抛_レ下従前知見。発_レ得大機、精励積_レ年、自然有_レ契当分。西聴而心服。
 と記している。

当時の南宋の仏教界においては、禅宗が隆盛していた。おそらくこの現象は、栄西にとっては異様に感じたことであらうと思う。とにかく同行の重源の帰国のすすめによつて、栄西は同年九月、在宋六カ月で、同船して帰国した。栄西は将来した天台の新篇章三十余部六十巻を天台座主明雲に献呈した。

この第一回の入宋で、栄西が学んだものについて、多賀宗隼氏は次のようにいわれている。

第一に、禅についてみるに、宋において禅の流行を目のあたりに見て、禅への強い関心をかきたてられた。そのことがやがて帰朝後の日本の、すなわち叡山の禅の研究の緒となつた。『護国論』（宗派血脈門第五）に、「秋に及んで帰朝す、而して安然の『教時諍論』を見て九宗の名字を知り、又智証の『教相同異』を閲して山門相承の巨細を知る。又次に伝教大師の『仏法相承譜』を見て、我が山に稟承あるを知り、畜念やまず、二十年を経たり」と記している。すなわち大陸の禅に触発されてはじめて叡山の禅に注目し、その伝統の深く長いことをはじめて知つた、といっているのは、叡山に学んだ栄西にとって今更の感あり、いささか奇異であるが、当時の叡山の教

学は次第に多岐にわたり、密教に専念するために顯教をかえりみず（覺超「三密料簡抄」、念仏に専らなるために密教を学ぶに違なし（源信「廿五三昧縁縁過去帳）」といっているのが実情なるを思えば、必ずしも怪しむを要しないであろう。

ここに叡山の禪の伝統をさぐって、安然—智証—伝教と遡っているのは、叡山教学の組織者たる安然によつて、教学全体を鳥瞰して禪の位置を知り、その依つて来るところを尋ねて智証に至り、そして伝教に及んだのである。教学の組織がすでに形成されていた栄西にとつても当時の人にとつて、従つて栄西にとつても当然の、禪の法脈の学習の順序態度が具体的に示されているのである。「畜念やまず、二十年を経たり」は、第一回入宋帰朝後第二回入宋前までの年月をさすのであり、従つて第二回入宋が右の如き準備と目的とのもつて行われたこと、それが第一回と密接に結びついていることを明らかにしている。要するにこの二十年間に禪研究に努めて後の飛躍の足がためをしているという点に注目しておきたい。

第二に、しかしながら、この二十年間は、以上の禪とならんで、しかもあるいはそれ以上に、密教の研究と修行との時期であつた。左にのべるように、帰朝後の六—七年間は、故郷の辺りの寺々を中心としての両備地方の弘法活動に費やされたが、それは専ら密教であつた。が、それにもまして、この時期の密教信仰の姿を今日によく伝えているのは、この間における多くの撰述である。

以上、この二十年間の栄西の活動は禪と密教と二つの面を有するが、禪はなお準備段階にあり、研究と修行実践の主力は密教に注がれていたと思われる。⁽⁶⁾

栄西は第一回入宋以後、再び入宋して、インドに赴き、釈尊の聖蹟に建てられた八大塔を礼拝したいと思うようになった。しかし、平頼盛にさとされて、その計画を思い止めていたが、文治元年（一一八五）に頼盛が亡くなると、栄西は第二回の入宋をくだてて文治三年（一一八七）夏、ついに南宋の首都杭州に渡つた。そうして栄西は知府按撫

侍郎に謁見して、陸路でインドに行く許可を願ひ出た。だが、北方民族によつて西域地方は支配されていて塞外に出ることができなかつた。栄西は目的を果たすことができず、船主に促されて帰国しようとして、洋上に出て逆風のために三日目に温州の瑞安県に吹きもどされた。栄西は、十数人と共に赤城に向い、天台山万年寺の虚庵懐敏に謁した。虚庵は黄龍派第八世の嫡孫である。「元亨釈書」は、虚庵と栄西の問答を次のように伝えている。

庵問曰、伝聞日本密教甚盛。端倪宗趣一句如何。対曰、初発心時、即成正覚。不_レ動_二生死_一、而至_二涅槃_一。庵慰誘曰、如_二子言_一、興_二我宗_一一般⁷⁾。

これより後、栄西は心を尽くして虚庵に参じた。のちに虚庵は天童山の二十三世住持になつたので、栄西もこれに随従し、三年余りの間、参禅して遂に印可されて黄龍の禅を相承した。これは紹熙二年(一一九二)のことであり、虚庵はこのことを証するために、僧伽梨・拄杖・白払・坐具・応量器・仏祖嫡承函・道号等を栄西に与えて法信とした。こうして、栄西は在宋五年の参学を終えて、建久二年(一一九二)秋、帰国することになつた。栄西は明州慶元府に行き、宋人楊三綱の商船に乗つて、肥前平戸の葦浦に帰着した。戸部侍郎清貫は筑前に富春庵を創めて、栄西を迎え、本邦最初の禅宗様の規式が行われたという。

ついで建久三年、栄西は香椎宮の側に建久報恩寺をひらき、建久六年には博多に聖福寺を開いて、禅化を盛んにするのである。

ところが、箱崎の良弁は栄西の禅化を嫉んで、叡山僧徒を動かして朝廷に訴え、栄西の追放を図つた。このことにより、建久五年七月五日、朝廷は栄西や能忍などの禅宗布教の停止をした。「百練抄」に次のように記されている。

七月五日甲子、入唐上人栄西、在京上人能忍等、令_レ建_二立達磨宗_一之由風聞、可_レ被_二停止_一之旨、天台宗僧徒奏聞云々、可_レ從_二停止_一趣被_二宣下_一云々⁸⁾。

ところが、栄西が再度入宋したところから、大日房能忍が摂津国水田三宝寺において禅法を広め達磨宗と称した。彼

の禪の修行については不明である。能忍は受法の証明をするため、文治五年（一一八九）に弟子二人を宋に派遣し大慧派の拙菴徳光に対して、書を通じてその境地を示し、印可と達磨像の著賛をえた。これによって自信を持ったのは当然である。叡山側の能忍に対する非難は、能忍が天台教学を否定したことであつた。栄西は、天台教学の四種相承のうち、禪に限って南宋の黄龍派の禪と取り換えることによつて、天台教学を復興させようとしていた。だが、その立場も認められないままに、能忍と同類のものとして弾圧されたのである。

そうして、建久六年になつて、朝廷では摂政関白九条兼実^二に詔して、栄西の弁明を徴することになつた。兼実は、高階仲資と藤原宗頼をして、栄西の主張を聞かせた。それによれば、禪はなにも今に始まつたわけではなく、かつて日本天台の開祖最澄も、『内証仏法相承血脉』の中で述べているように、その最初は、達磨がインドから伝えた仏法である。かの箱崎の良弁は無知のため、台徒を誘つて自分を訴えたが、もし禪宗が非ならば伝教も非ということになり、伝教が非ならば、台教は成り立たないことになる。そんなことでは最澄の思想も理解ができるわけがないではないかと栄西は逆襲した。この正論には、天台の識者も沈黙せざるを得なかつたという。『元亨釈書』は、このことを次のように記している。

六年詔^一藤相国^二召^三西府裏^一以^二主当令仲資^一徵問。尚書左丞宗頼預聞。西排^二斥偽党^一拳^二唱真乘^一。詞弁渙然冠纓聳^レ聽。西曰、我禪門者非^二特今始有^一之。昔叡山伝教大師嘗製^二内証仏法相承血脉一卷^一。其初乃我達磨西來之禪法也。彼良弁昏愚無知引^二台徒^一誣^レ我。禪宗若非伝教亦非、伝教若非台教不^レ立、台教不^レ立台徒豈拒^レ我乎。甚矣其徒之闇^二其祖意^一也。于^レ時台宗有識之者以^二西言^一為^レ善因^二是^一。

そこで天台衆徒が正統と認める禪は、最澄が脩然より相承した牛頭禪であつた。栄西の伝えた禪は南宋の黄龍派の禪であつて、異端視されたわけである。こうした天台衆徒の誤解を解消することと、能忍の達磨宗と一線を画するために『興禪護国論』を建久九年に著した。その後、栄西は叡山の弾圧をさけるため、京都の布教活動を中断して、新

天地を鎌倉に求めたのである。

三

鎌倉に下向した栄西は、『吾妻鏡』の記録によれば、幕府に信頼をえて布教活動を展開するのであるが、以前の禅宗布教とは異質な密教僧としての活動が顕著である。この点について今枝愛真氏は次のように述べている。

『吾妻鏡』にみえる栄西の鎌倉における行状のなかには、不思議にも、純粹な禅宗行事がまったくみられないことに誰しも気がつくであろう。この点、『興禅護国論』を著すまでにみられた栄西の性格と一見矛盾するかのよう
に思われよう。しかし、考えてみれば、宋朝伝来の異国情緒ゆたかな宋朝禅を十分咀嚼できるほど、当時の鎌倉
武士が知的に洗練されていたわけではけつしてなかった。したがって、新文化にあこがれていたとはいえ、実際
には、なお旧態依然たる天台密教風の祈禱仏事が主として受け容れられていたことを示すものとみるべきである。^⑩

そこで『吾妻鏡』に記されている栄西に関する記事を以下に列記する。

正治元年九月

六日乙卯、於_二幕府_一被_レ供_二養不動尊一鉢。導師葉上房律師栄西。布施被物五重。裘物五。馬一疋也。是於_二南都_一日来被_二造立_一。爲_二掃部頭親能沙汰_一。去比奉_レ召_二下之_一云云^⑪

正治二年正月

十三日庚子。晴。入_レ夜雪下。殆盈_レ尺。垸飯。土肥拵太郎沙汰也。迎_二故幕下將軍周闕御忌景_一。於_二彼法花堂_一。被_レ修_二仏夏_一。北條殿以下諸大名群参成_レ市。佛。繪像釋迦三尊一鋪。阿字一鋪。(以_二御台所御除髮_一。被_レ奉_レ縫_レ之。)

經。金字法華經六部。摺写五部大乘經。導師葉上房律師栄西 請僧十二口 布施 唱導師 錦被物十重 綾被物廿重 帖絹百疋 染絹百端 綿千兩 糸二千兩 白布百端 紺布百端 藍摺二百端 鞍置馬十疋¹²⁾

正治二年二月

十三日己亥。晴。亀谷地被¹¹⁾寄附葉上房律師栄西(後昇¹²⁾僧正)可¹³⁾為¹⁴⁾清淨結界¹⁵⁾之地之¹⁶⁾由被¹⁷⁾仰下。午剋。結衆等行道其地。施主監臨給。所右衛門尉朝光供¹⁸⁾奉御輿。義清持¹⁹⁾假屋²⁰⁾儲²¹⁾珍膳²²⁾云々未剋。堂舎(寿福寺也)當作亥始也。善信。行光等奉²³⁾行之²⁴⁾。

正治二年七月

六日庚申。尼御台所於²⁵⁾京都²⁶⁾被²⁷⁾凶²⁸⁾十六羅漢像。佐々木左衛門尉定綱調²⁹⁾進之。今日到来。御拜見後。令³⁰⁾奉³¹⁾送³²⁾葉上房之寺³³⁾給³⁴⁾云々³⁵⁾

建仁二年二月

廿九日甲辰。壞³⁶⁾渡故大僕卿義朝沼濱御舊宅於鎌倉。被³⁷⁾寄³⁸⁾附于栄西律師亀谷寺。行光奉³⁹⁾行之⁴⁰⁾。此事。当寺建立取初。雖⁴¹⁾有⁴²⁾其沙汰。僅⁴³⁾為⁴⁴⁾被⁴⁵⁾御記念。幕下將軍殊被⁴⁶⁾修⁴⁷⁾復其破壞。暫⁴⁸⁾不⁴⁹⁾可⁵⁰⁾有⁵¹⁾顛倒儀⁵²⁾之由。被⁵³⁾定之處。僕卿入⁵⁴⁾于尼台所⁵⁵⁾御⁵⁶⁾夢中⁵⁷⁾。被⁵⁸⁾示⁵⁹⁾云。吾常在⁶⁰⁾沼濱亭。而海辺極⁶¹⁾漁。壞⁶²⁾之令建⁶³⁾立于寺中。欲得⁶⁴⁾六衆⁶⁵⁾云々⁶⁶⁾

建仁三年九月

二日丁卯……午剋。大官令退出。遠州於⁶⁷⁾此御亭。令⁶⁸⁾供⁶⁹⁾養葉師如来像(日来奉⁷⁰⁾造⁷¹⁾之給。葉上律師為⁷²⁾導師。

尼御台所爲「御結縁」。可有「入御」云々⁽¹⁶⁾

元久元年二月

廿八日壬戌・今日。御逆修結願也。導師寿福寺方丈。⁽¹⁷⁾

元久二年五月

廿五日壬午。於「營中」。被「供養」五字文殊像。導師寿福寺長老云々。⁽¹⁸⁾

承元四年九月。

廿五日己酉。御本尊五字文殊像更被「遂」供養。導師寿福寺方丈。此儀五十度可「被」行之由。有「御願」云々⁽¹⁹⁾

建曆元年十月

十九日丁酉。晴。午尅。於「永福寺」。被「供養」宋本一切經五千余卷。曼陀羅供。大阿闍梨葉上坊律師栄西。讚衆三十口。題名僧百口也。將軍家御車御出。行村奉「行」之⁽²⁰⁾

建曆元年十月

廿二日庚子。晴。伊賀守朝光。永福寺之傍。建「立」梵宇。今日遂「供養」。導師葉上房律師。讚衆八人。相州并室家。匠作等渡御。⁽²¹⁾

建曆元年十二月

廿五日关西。於御持佛堂。有例文殊供養。導師葉上房律師柴西也。広元朝臣取布施云々²²

建曆元年十二月

廿八日丙子。將軍家明年依相当太一定分御厄。今日被行御祈等。葉上房律師柴西。定豪法橋。隆宣法橋等奉仕之。又親職。泰貞勤天曹地府祭。武州沙汰之給。²³

建曆二年六月

廿日甲午。將軍家渡御寿福寺。自三方丈手令相伝仏舍利三粒給云々²⁴

建保元年六月

二日辛未。晴炎旱涉旬今日寿福寺長老柴西。自京都參着。日来所望大師号。去月三日有議定。存生大師号。夏。本朝依無先蹤。同四日被任權僧正²⁵律師云々

建保二年二月

四日己亥。晴。將軍家聊御病惱。諸人奔走。但無殊御夏。是若去夜御淵醉余氣歟。爰葉上僧正候御加持之處。聞此夏。称良藥。自本寺召進茶一盞。而相副一卷書令獻之。所誉茶徳之書也。將軍家及御感悦云々。去月之比坐禪余暇書出此抄之由申之²⁶

建保二年六月

三日丙申。霽。諸国愁_二炎旱_一。仍将軍家嘸_三葉上僧正_二。爲_二祈雨_一持_二八戒_一。轉_二誦法花經_一給。相州已下。鎌倉中緇素貴賤誦_二誦心經_一。一心潔信而被_レ致_二精勤之誠_一也。⁽²⁷⁾

建保二年七月

一日甲子。霽。以_二民部大夫行光_一爲_二御使_一。可_レ爲_二大慈寺供養導師_一之由。被_レ仰_二葉上僧正_一云々⁽²⁸⁾

建保二年七月

廿七日庚寅。終日甚雨。今日。大倉大慈寺_{号_二新_一御堂_一}。供養也。已尅。尼御台所御輿。渡_二御彼寺_一。午尅。將軍家_{帶_二御身_一}御出。供奉人行列……中略……

到_二寺門_一。稅_二御車_一。右馬權頭參_二進獻_一御查。御堂上之後。導師葉上僧正柴西_{率_二伴僧廿口_一}參入。有_二供養之儀_一。其後。及_レ晚被_レ引御布施。被物三十重。御馬二十疋也。⁽²⁹⁾

建保二年十月

十五日丙午。於_二大慈寺_一。葉上僧正始_二行舍利会_一。⁽³⁰⁾

建保三年六月

五日癸亥。_霽。寿福寺長老葉上僧正柴西入滅。依_二痾病_一也。称_二結縁_一。鎌倉中諸人群集。遠江守爲_二將軍家御使_一。莅終焉之砌云々⁽³¹⁾

こうして、栄西は台密の祈禱僧として鎌倉幕府の帰依を受けることができた。建仁二年（一一二〇）に將軍頼家は、幕府の直轄領である六波羅の北端に建仁寺を創建し、栄西をその開山に迎えたのである。翌年六月には、頼家の奉請した宣旨により、建仁寺は台密禪の三宗を備えた延暦寺末の天台寺院として公認された。このときに栄西は寺内に真言院と止観院を併設している。このことは、当時、宋朝禪だけ行なう道場ではなく、従来の天台教団に属するものであることを表明したものである。

このように、栄西は鎌倉幕府の支持をえて京都に教線をはったが、叡山との対立は解消することができなかった。

四

栄西は第一回入宋の前に、すでに禪についての関心をもっていたのではなからうか。彼は『興禪護国論』に、広慧寺知客禪師に遇ったとき、

我国祖師伝禪帰朝。其宗今遺欠、予懐興廢故到此。願開示法旨。其禪宗祖師達磨大師伝法偈如何。²²
 といっていることから知られる。この禪はあくまでも四宗兼学のうちにおける禪であった。

栄西は帰朝後に、安然の『教時諍論』によって禪宗を加えた九宗の名を知り、智証大師の『教相同異』によって禪宗が入唐求法の大師たちによって将来されたことなどを知って、その確信をもったことが知られる。

彼は第二回の入宋では、天台山の万年寺において虚菴懷敏に参禅し、臨済宗黄龍派の印可を受け、四分戒と菩薩戒を授けられたのである。栄西は帰朝後に本格的に禅学研究に専念したのであろう。彼の禅学研究の歴史が、『興禪護国論』の「第四古徳誠証門」に要約されている。この門でいうことは、古来の有徳者がこの禪宗を修したことの証拠として、十項の証拠を述べている。

一者聖徳太子伝、並伝教大師一心戒中卷云、陳南岳思禪師、値^{マヤ}遇達磨大仏^師一蒙^マ教示^師云々。又天台観心論奥批

云、嵩山少林寺大師、以禪法一傳授南岳思禪師、禪師以禪法一傳授天台智者禪師云々⁽³³⁾

二者智者禪師、恒修此禪誦法華經、至是真精進是名真法供養如來、忽然大悟、自見靈山一会儼然未散云々⁽³⁴⁾
三者二祖已下、至今二十五代、天下行之⁽³⁵⁾

四者從後漢至唐一十八代、翻經三藏二百余人、或道或俗多訳禪要法門云々⁽³⁶⁾

五者唐道璿、來日南京、以此禪法付厲行表和上云々⁽³⁷⁾

六者日本伝教大師、於南都初聞此宗、終渡海到天台山修禪寺、稟受牛頭山之流、乃至豁然大悟云々⁽³⁸⁾

七者慈覺大師、常修此禪矣、在唐之日発願曰、歸朝建立禪院云々⁽³⁹⁾

八者智証大師釈宗体云々⁽⁴⁰⁾

九者安然和尚釈禪旨歸云々⁽⁴¹⁾

十者大宋見行有禪苑清規一部十卷、取要言之、一代五時諸經律論、皆是仏禪之旨歸也。仏之威儀行住坐臥併禪意也。經云、常在禪定悲愍衆生云云。是即誠証而已。⁽⁴²⁾

この十項の中の第三項は、二祖慧可より以後柴西に至る禪宗の伝法の系譜を示し、二十五代は柴西にあたるわけである。この項は、柴西の禪者としての自負を、暗に表明していると思われる。

そこで、柴西の主張する禪宗について、その禪思想を『興禪護国論』の上に見ていこうと思う。柴西は禪宗を定義して、

爰西来大師鼓棹南海、杖錫東川以降、法眼逮高麗、牛頭迄日域。学之諸乘通達、修之一生發明。外打涅槃扶律、内併般若智慧、蓋是禪宗也。⁴³

といっている。ようするに、菩提達磨によって中国に伝えられた禪は、高麗・日本までひろまった。仏教のいつさいの法門はこの禪を学することによって通達し、この禪を修して一生の間に明らかにしなした。『涅槃經』に智慧を心に悟ことを述べている。外面的には持戒し、内面的には般若を得るのが禪宗であるといっている。

柴西は、この禪宗は諸教の極理、仏法の総府であると位置づけて、禪宗の一宗を独立させることを主張して、次のようにいっている。

問曰、或人云、禪者諸宗通用法也。何建立別宗耶。答曰、以通用法立別称、又以一法爲兩分、其例不一矣。所謂律儀者、雖爲通用法、而今立律宗乎。比丘戒者、雖無別途、而五天分五部也。三藏雖一途法、而分二十八部。中論直談一実諦、而爲三論天台二宗之依憑也。真言偏秘密乘、而置東寺天台兩門。何況禪宗諸教極理仏法總府。別立一宗無妨歟。⁴⁴

さらに禪宗は八宗のなかに含まれないという。この禪宗の特質は、『金剛般若經』、『維摩經』を所依とし、即心是仏を宗とし、心に執着することのないのを修業とし、諸法は空であることを義理としている。そして仏世から衣鉢を授受して師資相承しているところにあるという。

問、彼禪宗爲は何宗。答、其宗非八宗攝也。問、其宗教相如何。答、禪宗金剛般若經維摩經爲所依、即心是

仏爲_レ宗、心無_二所着_一爲_レ業、諸法空爲_レ義。始自_二仏世_一衣鉢授受、師資相承更無_二異途_一、具出_二伝記_一者也。⁴⁵

ある人がいうのに、禅宗に不立文字といっているのは、怠け者が聖教を学ばないでよいことになり、これではかえって仏法を滅するになるであろうという非難に答えて、栄西は『観仏三昧経』の経説を引いて三法の修学を述べている。この禅宗は、学としては釈尊一代の教法に亘り、行は六度の徳目を兼ねるものである。禅宗が即心是仏といつて、聖教を学び知ることがなかったならば、それはとんでもないことになるかと答えている。

問曰、或人云、此宗言_二不立文字_一者、懶惰輩不_レ学_二聖教_一而還滅_二仏法_一。答曰、観仏三昧経云、欲_レ観_二如来_一、未来世中諸弟子等、应_レ修_二三法_一。一者誦_二修多羅甚深經典_一、二者淨_二持禁戒_一威儀無_レ犯、三者繫念思维心不散乱_一。是故此宗学_二亘_二八藏_一行兼_二六度_一者也。若_二言禅宗即心是仏_一、而不_レ伺_二教跡_一者、何異_二夜当_一曉而未_レ明除_二燭墮_一罅_二乎_一。⁴⁶

栄西は、禅の参究のありかたについて、三種の立場があることを述べている。その第一は約教分である。

初約教分者、謂諸教也。鈍根人先伺_二諸教諸宗之妙義_一、学_二禅之旨歸_一、爲_二修入之方便_一也。宗鏡録引_二六十部經論_一、蘊_二三宗妙義_一、註_二三百余家語句_一、以_二釈_二宗旨_一是也。⁴⁷

第二は約禅分である。

次約禅分者、謂仏禅也。不_レ拘_二文字_一不_レ繫_二心思_一、是故離_二心意識_一、参_二出_二凡聖路_一学_二。是約_二最上利根人_一也。⁴⁸

第三は約総相である。

三約総相者、謂_二云_レ教云_レ禅、但有_二名字_一。云_レ参云_レ学、亦是假名、我人衆生乃至菩提涅槃、皆亦名字。実無_二所有_一。仏所説法亦是名字、実無_二所説_一。是故禅宗離_二文字相_一離_二心縁相_一、不可思議畢竟不可得。所謂仏法者、無_二法可_レ説、是名_二仏法_一。今謂禅者即其相也。⁴⁹

これらの三種の禅の立場において、第一の約教分は学解的な禅の把握をいったものであり、第二の約禅分は体験的な

禪の把握をいつたものであり、第三の約総相は実証的な禪の把握をいつたものであろう。古田紹欽博士は次のように
いわれている。

この一門はことに栄西が自らに究めた參禪体験の深さと、一大碩学であつた豊富な学識とを偲ばせ、縦横に張つた論陣に見る説得力には、難渋な文体ながら読むものをして感銘を覚えしめないものはなからう。また禪の正宗を標榜するにつけても約総相の立場を取つて主張していることは注目すべきであり、往々にして世間の談論は実に益するところがなく、教法の諍論にしてこれまた同じであり、「教と云ひ禪と云ふも、但だ名字有るのみ」であるのに、当時教だの禪だのといったことによる無益の論が、世間にあつても出世間にあつてもあつたことを思うと、栄西の「約総相」には重要な意味を含んでいってよからう。³⁰⁾

栄西は、今いう禪宗とは清浄如来禪で、三学宗という名称はない。梁朝に達磨が禪宗を中国に伝えて以来、禪宗はただ禪宗と号し、その外に別称もなく、異流による名称もないといつてゐる。

今之禪宗者清浄如来禪也。無三学名字、梁朝已来只号「禪宗」而已、更無別号、無異轍一矣。³¹⁾

また「楞伽經」を引いて、禪宗はこの經に説く第四の如来清浄禪であることを述べてゐる。

又楞伽經有「四種禪」。一愚夫所行禪、二觀察相義禪、三攀縁如実禪、四如来清浄禪。謂「入如来地」一行中自覺聖智相、是禪相也。³²⁾

栄西は、この禪を末世の根器の微弱な諸子にすゝめて、直道の縁となるようにしたのである。少聞薄解のものであつても、大鈍小智のものであつても、もし専心に坐禪するならば、必ず仏道を究めるであらうといつてゐる。

方今以「此禪」欲勸「末世稚子」、而爲「直道之縁」矣。雖「云少聞薄解之輩」、雖「云大鈍小智之類」、若専心坐禪、則必得「道」。³³⁾

五

次に栄西の戒律思想について検討してみようと思う。彼は『興禪護国論』の「令法久住門」において、法をして久しく住せしめるものは戒律であることを多くの典籍によつて述べて、「依_レ扶律禪法_二令_レ法久住_一」⁵⁴と結んでいる。彼は淨戒を方便とすることを述べて、

況此禪宗者。不_レ必望_二長遠之果_一。不_レ敢期_二後日之益_一。以_レ淨戒爲_レ方便。拔_二眼前之毒箭_一。期_二即生之妙悟_一也。⁵⁵
 といっている。この外、戒を初めとし先とするという考えは、栄西の言葉に多く見られる。例えば、

(a) 禪苑清規云、蓋以_レ嚴_二淨毘尼_一、方能弘_二範_三三界_一。然則參禪問道、戒律爲_レ先。既非_二離_レ過防_レ非、何以成_レ仏作祖_一。⁵⁶
 とあり、

(b) 是故此宗以_レ戒爲_レ初、以_レ禪爲_レ究、若破戒者悔心止惡則号_二禪人_一也。⁵⁷
 ともいつている。

このように戒を「先」、「初」とすることは仏教の通説として理解できる。しかし、戒律を「宗」とする次の表現になると、その意味が異なってくる。

問曰、或人難云、何故禪宗新称_二令法久住_一耶。答曰、戒律是令法久住之法也。今此禪宗以_二戒律_一爲_レ宗、故立_二令法久住義_一耳。⁵⁸

この「以_二戒律_一爲_レ宗」の意味するところは、禪宗の基礎とするという意味があるのであろう。

栄西は叡山において日本天台の円頓戒を受けた天台僧であったが、第二回目の入宋により黄龍派の虚菴懷敏に師事して、禪を究め、虚菴より四分戒と菩薩戒を受けたのである。彼は大小両戒の受持を主張したことに関して、当時のわが国の僧風の乱れが一因であり、もう一点は宋朝禪林の伝統を移植することにあつたと考えられる。栄西が禪林の清

規として重視した『禪苑清規』に

然則參禪問道戒律為_レ先。既非_二離_レ過防_レ非、何以成_レ仏作祖。……中略……既受_二声聞戒、應_レ受_二菩薩戒_一。此入法之漸也。⁵⁹⁾

と述べられている。

柴西の大小両戒の把握のしかたは、道宣や湛然の説によつてゐる。

道宣律師云、或云、我是大乘之人、不_レ要_レ行_二小乘法_一、此則内乖_二菩薩之心_一、外欠_二声聞之行_一。自_レ非_二知_レ法達士、孰能鑑_レ之者哉_文。甚深哉此言乎。為_二禪宗要樞_一也。天台宗弘決云、問云、今明_二衍門、何須_二小檢_一而明_二十種得戒人_一耶。答涅槃中処処扶_レ律、今此亦爾。小_レ為_二方便_一。故知_レ出家菩薩六和十利与_二声聞_一同六度四弘異_レ於小行_上。若在家菩薩三帰五戒咸趣_二菩提_一、況復梵網八万威儀、七衆並資五道通被。豈容_二破戒_一称_二為_二仏乘_一。故以_二乘戒四句_一对簡_文又云、大経及十住婆沙、皆指_二篇聚_一云、菩薩摩訶薩持_二此禁戒_一常_レ知_レ戒無_二大小_一、由_二受者心期_一。是則中道遍入_二空仮及事律儀_一、方得_二名_二為_二具足持戒_一_文⁶⁰⁾

柴西は、これらの文によつて、大小両戒の受持を行うのである。このことが如来清淨禪に入る方便であるとしてゐる。彼は「戒無_二大小_一。由_二受者心期_一」として、大小両戒の戒相の差異を認めず、戒を受持する人の心によつて差異を生ずるといふ。

そこで柴西は四分、梵網の戒によるべき理由によつて、

四分梵網等戒、是正所宣也。外学_二声聞威儀_一、内持_二菩薩慈心_一故也。⁶¹⁾

といひ、こゝにいう菩薩の慈心が梵網菩薩戒の受持によつて保持されるといふ。

柴西は『出家大綱』において、菩薩戒は菩薩の心に大悲般若の心をおこすことを述べて、次のようにいふ。

菩薩戒者梵網三聚十重四十輕戒是也。其心從_二其戒_一純発_二大悲般若之情_一。於_二衆生_一無_レ憎愛差別。於_二仏法_一離_二偏

円分別。応行速行。応学忽学。不競諍是非。只進歩菩薩意地。応爲三人福田。是菩薩戒也。⁶²

それでは栄西は叡山の別授の菩薩戒についてどう見たのであろうか。彼は『出家大綱』で次のように述べている。

頃有大徳自看誦戒威云、山門別授菩薩戒非正破云、遠截三七七遺流等云云。親聞此言哀憫無極、其人已墮

魔網、千仏無能救乎。其人欲生般若還燥、般若種子、尤可悲矣。学般若者惡尚不可憎、況善哉。凡觀

達迷中是非是非俱非。夢裏有無有俱無。其是般若也。何況如來說教區區大士弘經品也。伝教大師別授菩薩戒有

何過失哉。我大師若不建立別授菩薩戒者、此土末代無持律人、因何結戒縁哉。況彼時賢人明匠乏其人

哉。何況別授菩薩戒特有由乎。口訣庶幾一門同袍莫憚彼謗。⁶³

この記述は栄西の円戒観を表明したものであるが、最澄の別授戒には何の過失もないことをいい、末代の持律の人のために必要なものであることをいっている。さらに続いて、

梵網八万威儀中何不撰五戒八戒十戒二百五十戒哉。又有伝教大師元意不可顯示歟。⁶⁴

と述べて、梵網戒の八万威儀のうちに五戒乃至二百五十戒を撰しているともいつてゐるが、最澄の別授菩薩戒の創設の意図は全く示すことができないとしている。

六

栄西は平治元年（一一五九）から四年間、叡山北谷竹林庵の有弁について台教を学び、また千命について密法灌頂をうけた。そして彼は長寛元年（一一六三）に備前の銘金山遍照院に住し、日応山に三摩耶を修法した。仁安二年（一一六七）には帰郷して父母を省し、宇佐八幡宮に詣でたが、この頃に伯耆大山の基好について台密の奥義をうけ、再度叡山にもどつて、頭意からも密灌をうけている。

栄西は「入唐取経願文」に

于^レ是有^ニ一沙門^{一名}榮西^生備州^而少年出家。志有^ニ秘密教^{。多年}苦行。而去^レ戊子歲渡海之後。願^レ請^ニ宋朝之藏經^心尤切也。⁽⁶⁵⁾

と記している。これによれば彼の出家の目的は密教の学習にあつたといえる。

栄西の密教に関する著作について、多賀宗隼氏は「胎口決」、「出纏大綱」、「誓願寺縁起」、「孟蘭盆一品経縁起」、「法華経入真言門決」、「菩提心別記」、「秘宗隠語集」、「菩提心論口決」を指摘されている。⁽⁶⁶⁾ なお多賀氏は、

ただ恐らく云い得ることは、前半生に於ては密教がその信仰の主座を占めていたことである。然らば後半生に於てはその関係は如何、これは容易に測定し難い所である。今の場合、それは併存したことの確実なるを知つただけであつて、信仰における位置はこの時代の栄西の信仰の全貌に照されなければならぬ。従つていまはこれは問題の外に置かなければならぬのであるが、「興禅護国論」「出家大綱」等の、後半生の新しい立場を代表するかと思われる撰述の思想と、一生を貫いたこの密教的立場とは、どう関係していたであろうか。建仁寺に天台・真言・三宗をおいた、とういうとき、栄西の本意がどこにあつたか、それを明瞭に断ずることは必ずしも容易ではないが、「護国論」に於てその大綱を握つて云えばやはり禅が中心であり、戒と天台宗（円教）とはその中に摂して考えていたようにみえる。そういう意味に於て、後半生の信仰の一の中心が禅であつたことは大体に於ていい得るとすれば、この時代の信仰の二つの大道、禅と密教との関係如何は、栄西の思想にとつて最後の最も大きな問題として浮び上つてくることとなるであろう。⁽⁶⁷⁾

と述べられている。この禅と密教の関係については、今後の課題とする。栄西の総合的仏教の中興の運動の拠点は齋戒におかれる。

栄西は『出家大綱』に「仏法者齋戒為^ニ命根^ト」⁽⁶⁸⁾といひ、さらに「当^ニ知^レ仏法者^ハ仏^ノ妙義也^{。知^リ其^ノ義^一弁^ニ其^ノ理^一行^ニ其^ノ儀^一之人^方云^ニ仏法者^ト也[」]と述べている。『齋戒勸進文』に「夫齋者不^ニ非^ニ時^ニ食^一也、戒者菩薩戒也[」]⁽⁶⁹⁾といつ}

て、
 「仏言不_レ念_二齋戒_一非_二我弟子_一」⁽⁷¹⁾と述べて齋戒を主張している。

柴西は元久元年（一二〇四）に『日本仏法中興願文』を著した。この『願文』の意図は日本仏法の中興であつて、持戒を修めることが仏法を再興することになり、王法を永固にすることになるといつている。

近世以来、比丘不_レ順_二仏法_一、唯口能語之、学者不_レ習_二律儀_一、^(仏原文)只形状似_レ之。高野大師云、能誦能言、鸚鵡尚能言而不_レ行、何異_二猩猩_一云云。可_レ恥_二此言_一乎。縱_二其行_一勿_レ令_二輕弄_一、然而近代人翻_レ此咲_二持戒_一、蔑_二梵行_一爲_レ之如何。小比丘柴西、爲_レ救此陵替_一亡_二身命_一遊_二兩朝_一、学_二如来戒威_一持_二菩薩戒律_一、先勸_二門徒_一漸及_二疎人_一、望_二請慈恩_一往_二自利利他賢慮_一、誘_二進沙門_一勸_二励比丘_一、令_レ下_二修_二梵行_一持_二戒律_一者、仏法再興、王法永固乎。⁽⁷²⁾

柴西は『願文』に仏法と王法を修復することを最も望むとして、彼の大願はただこの仏法と王法の中興にあつた。彼は仏法と王法の関係について

其仏法者是先仏後仏之行儀也。王法者是先帝後帝之律令也。謂王法者仏法之主也。仏法者王法之宝也。⁽⁷³⁾
 と述べている。『興禪護国論』の興禪が護国に外ならないとする思想を受けいられると思われ、が、『願文』では興禪をいわずに日本仏法の中興をいつていることは、柴西の思想の変化を示すものであるといえよう。

古田紹欽博士は次のように述べてみえる。

『興禪護国論』を撰して、禪の正宗の独立を標榜はしたものの、その独立が旧仏教の統制下にあつては如何に困難なものであつたかを痛感した柴西は、禪をもつて仏法の総府であるとした思想を一転して総府としての仏法こそ宗派に超越してあるべきであるとし、しかもそれは、日本仏法であるべきであるとして、日本的とでもいふべき、その総合仏教を唱えた。⁽⁷⁴⁾

柴西は『願文』に「伏_二乞_二普賢願王_一、守_二護_二三宗法利_一、乃至普_二濟_二群生_一」⁽⁷⁵⁾といつている。この三宗の法利は真

言。止観。禅の三宗を併置した建仁寺であろう。この建仁寺を日本仏法中興の拠点と考えた。その日本仏法の中興の根拠として斎戒を力説した。

註

- | | | | |
|------|--------------------|------|------------------|
| (1) | 日仏全一〇一、二二下 | (20) | 同右 六五八頁 |
| (2) | 今枝愛真氏『中世禅宗史の研究』二頁 | (21) | 同右 六五九頁 |
| (3) | 日仏全一〇八、八三下 | (22) | 同右 六六〇頁 |
| (4) | 大正八〇、一a | (23) | 同右 六六〇頁 |
| (5) | 日仏全一〇八、八四上 | (24) | 同右 六六四頁 |
| (6) | 多賀宗準氏『栄西』四〇頁〜四三頁 | (25) | 同右 第廿一、六九五頁 |
| (7) | 日仏全一〇一、二三下 | (26) | 同右 第廿二、七〇九頁〜七一〇頁 |
| (8) | 『百鍊抄』一二五頁 | (27) | 同右 七一〜七一二頁 |
| (9) | 日仏全一〇一、二四下 | (28) | 同右 七一二頁 |
| (10) | 今枝愛真氏『中世禅宗史の研究』一〇頁 | (29) | 同右 七二三頁〜七四頁 |
| (11) | 『吾妻鏡』第十六、五六〇頁 | (30) | 同右 七二四頁 |
| (12) | 同右 五六四頁 | (31) | 同右 七二六頁 |
| (13) | 同右 五七二頁 | (32) | 大正八〇、一〇a |
| (14) | 同右 五七五頁 | (33) | 大正八〇、九a |
| (15) | 同右 第十七、五九四頁〜五九五頁 | (34) | 大正八〇、九a |
| (16) | 同右 六〇四頁 | (35) | 大正八〇、九a |
| (17) | 同右 第十八、六一七頁 | (36) | 大正八〇、九a |
| (18) | 同右 六二四頁 | (37) | 大正八〇、九a |
| (19) | 同右 第十九、六五三頁 | (38) | 大正八〇、九a |
| | | (39) | 大正八〇、九a |

- (40) 大正八〇、九 a
- (41) 大正八〇、九 a
- (42) 大正八〇、九 a
- (43) 大正八〇、二 a
- (44) 大正八〇、五 b、五 c
- (45) 大正八〇、五 c
- (46) 大正八〇、六 c
- (47) 大正八〇、一 b
- (48) 大正八〇、一 b
- (49) 大正八〇、一 b
- (50) 古田紹欽氏『日本の禪語録』一、五三頁
- (51) 大正八〇、八 b
- (52) 大正八〇、一 b
- (53) 大正八〇、一 b、二 c
- (54) 大正八〇、二 c
- (55) 大正八〇、一三 c
- (56) 大正八〇、二 b
- (57) 大正八〇、七 a
- (58) 大正八〇、七 a
- (59) 卍統蔵一、二、一四、五、四三九右上
- (60) 大正八〇、一三 b
- (61) 大正八〇、一三 b
- (62) 『出家大綱』正治二年翻刻本一一右
- (63) 同右一一左

- (64) 同右一二右
- (65) 日仏全(遊方伝叢書三)
- (66) 多賀宗隼氏『栄西禪師と臨濟宗』栄西の密教について
五〇頁以下
- (67) 同右六六頁
- (68) 『出家大綱』正治二年翻刻本一右
- (69) 同右一右、一左
- (70) 『斎戒勸進文』元久元年翻刻本
- (71) 同右
- (72) 『日本仏法中興願文』元久元年翻刻本
- (73) 同右
- (74) 古田紹欽氏『栄西禪師と臨濟宗』「栄西研究」九五頁
- (75) 『日本仏法中興願文』元久元年翻刻本